

# 讃岐丸亀城 発掘調査概報

丸亀市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は丸亀市教育委員会が平成元年度に実施した史跡丸亀城環境整備事業に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本城跡は丸亀市一番丁に所在する。
3. 調査期間は平成元年11月1日から平成2年3月31日までの期間である。
4. 調査は下記の組織で実施した。

調査主体 丸亀市教育委員会

調査委員会会長 石田　薰

“ 副会長 織田 金四郎

“ 委員 藤井 致一

“ “ 直井 武久

“ “ 堀家 守彦

“ “ 秋山 忠

調査事務局社会教育課

“ 西川 満雄

“ 梶浦 鐵夫

“ 都築 健

“ 平尾 哲男

“ 調査担当 東 信男

(現場作業員) 大井・行天・辻村・林・藤塚・藤本・村山・宮家・林  
塙田・平尾・佐藤・東野・藤田・黒色・市村・畠・永安  
平山(敬称略)

(調査補助員) 都築加代子・平井清子

(測量補助員) 御子川内まゆみ・合田由加里

5. 調査に際しては、下記の機関の方々より多くの御教示、御協力を得た。記して感謝したい。(敬称略)

水野 正好(奈良大学教授)

大山 真充(香川県文化行政課)

国木 健司(　　〃　　)

片桐 孝浩(香川県埋蔵文化財センター)

宮上 茂隆(東京理科大講師)

6. 本書の執筆、編集は東 信男がおこなった。
7. 遺物の表示はS A - 築地塀・柵, S B - 建物, S D - 溝, S K - 土壙, S X - その他である。
8. 遺構実測図の方位は真北を示し、水準線(H)の数値は海拔高度である。

## I はじめに

丸亀市の市街地の南、亀山（旧名波腰山）に所在する丸亀城は、讃岐17万5000石の大名生駒氏により慶長2年（1597）に築城され、元和の一国一城令（1615）により廢城となり生駒氏の丸亀城の歴史は終わる。生駒氏改易後、讃岐は東讃と西讃に二分され、寛永18年（1642）、山崎家治は西讃5万3000石の大名として入封する。山崎氏は生駒氏が築城した亀山の地に再び築城する。現在みられる城の繩張りは山崎氏時代のものとされている。山崎氏絶家後、名家京極氏が6万7000石で播州竜野から入封し、山崎氏の築城工事を引き継ぎ、山上山下の城郭施設を整備拡張している。

明治2年（1869）藩邸が焼失、明治10年（1877）に櫓や城壁が取り壊された。残された天守、大手一門、二門は国指定重要文化財となり、丸亀城址も昭和28年（1953）に国指定史跡となった。

現在の丸亀城は山下の曲輪に、図書館、資料館、グランド、遊園地などの施設があり、文化機関及び憩いの場所として利用されている。今回、市の象徴である丸亀城を保存・活用しようとする方針のもとに、丸亀城の環境整備が計画された。平成元年度の発掘調査もこうした環境整備の一環として、丸亀城整備の基礎資料の収集を目的に行なった。

## II 位置と環境

丸亀城①は、香川県丸亀市一番丁に所在する。丸亀平野は讃岐中西部に位置する沖積平野で、東に土器川、西に金倉川が流れ、両川とも瀬戸内海に注ぐ。平野の東には青ノ山、飯ノ山（讃岐富士）があり、西には天霧山、我拝師山、南に市民の水源地となる満濃池がある。

土器川の西岸の河口付近に火成岩質の標高66メートルの亀山（旧名波腰山）がある。丸亀城はこの亀山に築城されている。生駒、山崎氏時代は大手を南にしていたが、京極氏時代に大手は北に移されている。城の北側に広がる市街地は城下町として発展し、江戸時代中期から、金毘羅宮参拝の入港地として賑った。建物こそ変化したが市街地はいまなお城下町の地割をよく残している。

丸亀城の周辺地名に中津、今津、津の森、高津などがあり、築城以前は海岸線がより南へ湾入していたと推定される。

東に城山、五色台山系の石器石材の産地があり、市内の各所で石器が採集されている。弥生時代の遺跡としては中ノ池遺跡②、田村池遺跡③の所在が確認されている。古墳時代には、前方後円墳の吉岡神社古墳④のほか、青ノ山の群集墳⑤、また飯ノ山にも存在が知られている。青ノ山には須恵器窯・青ノ山一号窯⑥がある。奈良、平安時代の遺跡は、宝幢寺跡⑦、田村廃寺跡⑧、平安初期の泉水最古廃寺跡⑨などの寺院跡や郡家跡がある。鎌倉時代の遺跡には和泉屋敷石塔があり、室町・安土桃山時代の遺跡には、金倉城跡⑩、青野山城跡⑪がある。室町時代には、鵜多津（綾歌郡宇多津町）に讃岐守護細川氏の居館が築かれ、讃岐の玄関港として栄えた。鵜多津聖通寺山には奈良氏の居城、聖通寺山城があり、奈良氏が支城として津の森に属城を築いたとされている。西の天霧山には讃岐の雄、香川氏の居城、天霧山城址（国指定史跡）があり、如意山の西に延びる尾根の先端には櫛梨山城址があり、丸亀の地は讃岐の大勢力に挟まれた地であった。江戸時代の遺跡としては、京極氏の別館、中津万象園⑫などがあり、海岸線には塩田が広がっていた。丸亀港内には、江戸講中灯籠⑬（通称太助灯籠）があり、著名である。



図1. 丸亀市遺跡地図

### III 丸亀城の築城

亀山（旧名波腰山）に最初の本格的な近世城郭を築いたのは生駒親正、一正父子である。生駒親正是永禄年間（1558～1569）から秀吉に従い、豊臣政権下で中老という要職にあった。天正15年（1587）に播州赤穂6万石の領主から、讃岐17万6000石の大名として入封、当時築城の名人として知られた黒田如水、藤堂高虎により繩張りされた高松城を本拠地としていた。慶長2年（1597）に西讃の押えとして、亀山に築城を開始した。

生駒氏築城以前は、『南海通記』によると応仁年間（1467～1468）に聖通寺山城主奈良太郎左衛門元安が津の森に属城を築いたとされる。この属城の位置は当地かどうか確証はないが砦として使用された可能性はある。

『生駒記』『西讃府志』『南海通記』によると生駒氏の丸亀築城開始は慶長2年（1597）とされている。丸亀城の内部は東西4町（327メートル），南北3町（245メートル），外郭は東西6町（490メートル），南北8町（645メートル）である。「讃岐丸亀城以中岡宿之」から生駒氏の築城計画をうかがうことができる。  
図2

山上に1～4段をもうけ、一ノ段（本丸）には四隅に櫓を配し、中央に天守を置く。その東側に二ノ段（二の丸）がある。山上では最も広く、南西隅に山上の大手絵形が開く。二の段の東側、本丸の西側に三ノ段（三の丸）がある。二ノ段の東側にある三ノ段に、揚手の絵形がある。四ノ段は山上では最も低い曲輪であり、東南隅と西北隅にある。

大阪の陣で豊臣氏を滅ぼした徳川幕府は、元和元年（1615）に一国一城令を出し、大名の城譜請を規制した。生駒氏も丸亀城を廃城にし、高松城にひきあげた。やがて寛永17年（1640）にお家騒動が起り、生駒氏は改易となる。

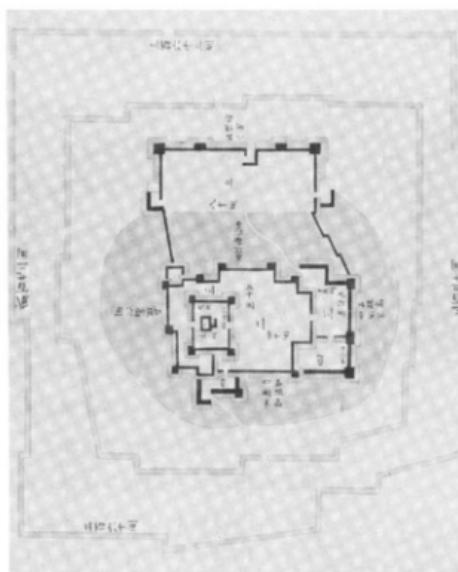


図2 生駒氏絵図

生駒氏改易後、伊予大洲城主加藤出羽守が丸亀城のある那珂郡を支配するが幕府は讃岐を三分し、寛永18年（1641）に肥前天草郡富田城主山崎甲斐守家治を5万3000石の領主として、西讃に入封させた。山崎氏は寛永19年（1642）に生駒氏の城郭跡地に築城を開始した。山崎氏は正保2年（1645）に幕府に木図ならびに絵図を提出した。山崎時代の絵図と現在の城の繩張り  
図3  
はたいへん類似している。山上には、本丸、二の丸、三の丸を配置し、太丸には5つの櫓（うち北側中央は天守）をおき、本丸入口は鉤型に絵形をつくる。

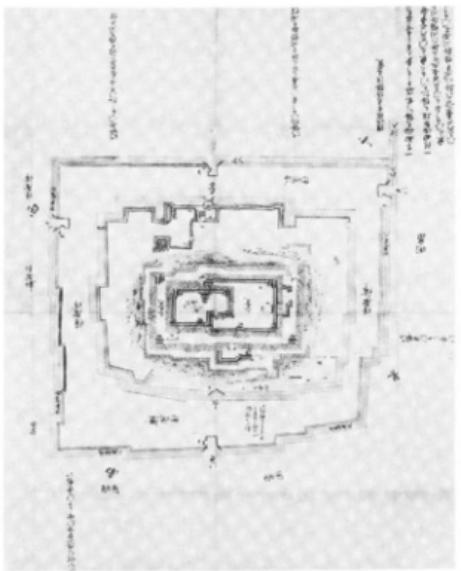


図3 山崎氏絵図

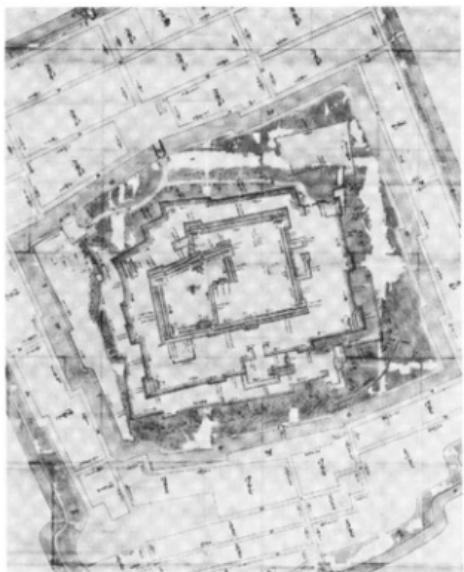


図4 「元文年譜岐国丸亀城絵図」

樹形を出たところには二の丸で、山上では最も広い曲輪である。東側に櫓門をおく樹形が、また西北側に掘手がある。本丸・二の丸の周囲には三の丸がめぐり、三の丸南側中心部に山上の大手樹形がある。北東隅には山下に至る道（現みかえり坂）がある。山下には内堀に囲まれた帯曲輪があり、北側には両側を堀切った居館跡地がある。東側、西側、北側の三方に土橋がかかり内樹形をとる。明暦3年（1657）に山崎氏の四代治頼が幼少で没したため山崎氏は絶家となった。山崎氏時代の築城は、山上の石垣などの普請はある程度完成していたが、櫓や居館などの作事は工事途中であったと推定されている。

山崎氏の後に丸亀城に入城したのは、播州竜野城主京極刑部少輔高和で、万治元年（1658）2月のことである。京極氏は西讃5万石の大名である。山崎氏と京極氏の城譜請の相違は、山下の帯曲輪の北側に大手を用いたことである。また、絵図にある山崎氏の居館跡地（推定）の両側にある山下まで延びる堀切りは、現在の繩張りと比較すると、西側は山下まで掘切っているが、東側では山下まで堀切ら

れていない。このことから山崎氏時代には完成していなかったといえる。山上についても基本的な縄張りの変化はないが、三の丸下に帶曲輪がめぐっている。櫓等の作事であるが、昭和25年の天守解体修理時に万治3年の札がみつかり、京極時代の完成がうかがえる。また、瀬山登の手記により、万治3年(1660)に、京極氏は幕府に城普譜についての許可申請を提出している。<sup>註1</sup>山上の東側石垣および6ヶ所の櫓、山下の居屋敷の曲輪の石垣および櫓4ヶ所、そのほか多聞、堀が末首尾のままで山崎氏が改易になったため、この工事を継続したいとい<sup>註2</sup>うものであった。瀬山の手記には他にも、寛文7年の三の丸櫓台普譜、同10年の太鼓櫓の完成、貞享2年(1675)の破損箇所の修復、元禄5年(1692)の堀普譜などがあげられる。また、寛文10年(1670)作と推定される木図(京極時代)からも城の構造がうかがわれる。木図は城の構造を木形であらわしたものである。本丸には5ヶ所櫓を配置(うち北側中央天守)し、東南隅櫓、西南隅櫓から北西隅櫓、北西隅櫓から天守、天守から東北隅櫓へと多聞をめぐらせ、東南隅櫓から本丸東側石垣へは堀がめぐる。本丸入口の樹形には、高麗門があった。二の丸には4ヶ所櫓が配置され、二の丸東側入口の樹形は櫓門となっていた。三の丸には、三ヶ所櫓が配置されている。月見櫓(東南隅櫓)と今回調査を行った西北隅櫓、同称周辺部を調査した南西隅櫓がそれである。三の丸には、多聞・堀などは配置されていなかったようである。

こうしてみると、山崎氏の時代から築城が開始された丸亀城は、京極氏時代になってもなお工事が継続され、次第に完成していった過程が史料からよみとることができる。

#### IV 調査の概要

平成元年度の調査は本丸東南隅櫓、本丸西北隅櫓、三の丸西北隅櫓の櫓内及び三の丸西南隅櫓を加えた櫓の周囲、本丸中央部と三の丸内の井戸曲輪である。本丸内はA～C区の3区に分け、A区は東南隅櫓と周囲、B区は本丸中央部、C区は西北隅櫓と周囲とした。三の丸内はD～Fの3区に分け、D区は西北隅櫓と周囲、E区は西南隅櫓の周囲、F区は井戸曲輪とした。

調査はA区から開始、埋没していた本丸東南隅櫓(SB002)の東の石垣を確認、絵図・木図とよく一致した。SB002の東側から、本丸石垣の内側を保護する石壘(SX001)を検出した。SX001から北側にかけて、瓦の廐棄層が約60cm

の厚さでみられる。瓦は、軒丸瓦，丸瓦，軒平瓦，平瓦，鬼瓦が出土した。また、壁土・漆喰・釘なども出土している。

下から、礎石建物（SB015）、瓦の雨落ち（SX003）を検出したが、木図やどの絵図にもSB015はみられなかった。木図・絵図では解となっている。また、SX003は昭和の土壤（SK004）により北側を破壊されていた。SK004の下から暗渠（SD001）を検出したが、今回の調査では南半分しか検出していない。

SD001は55cm前後の石を置く。そして、本丸の東石垣中にある排水口に繋がる。SB002の北側は客土、下に瓦、漆喰などの廃棄層、その下から石製の加工された排水路（SD002）を検出した。排水路の中から四つ目紋瓦が出土したため、このSD002は京極氏時代に使用されていることが確認された。瓦・漆喰などの廃棄層は明治10年（1877）、槽を破壊した時の層である。SB002の西側の瓦、漆喰などの廃棄層下から、SD002と同様の排水路（SD003）と西へ延びる礎石列を検出。本丸の南石垣から約5.40mのところにある。内部からも礎石が検出された。建物跡である。木図・絵図にある本丸南の多聞（SB012）に推定できる。排水路（SD003）は南多聞（SB012）にも沿っている。隅櫓（SB002）内に昭和の土壤（SK002）があり、堀り返すと、櫓内は栗石敷きで、礎石を配置していることが判明した。天守の地下構造と同じである。

B区は生駒時代の天守の確認調査をおこなった。2m×20mで中央に畦を残したので畦の東側を東トレント、西側を西トレントとした。東トレントの東側から、地表から0.16mの深さに地山の岩盤を検出した。生駒時代の絵図には岩盤はみられないが、生駒時代の遺構面が山崎・京極氏時代の遺構面より下層にある場合は岩盤が露出していたことが十分考えられる。東トレント中央の岩盤の上層の黒褐色細砂層中から、土師質の小皿、杯の破片が出土した。断面にも土師質皿の破片が残っていた。東トレントの西側の地表下1.45mから岩盤を検出したため、西へいくほど岩盤のレベルが下がることが確認できた。西トレントの西側から集石層を検出、粘質細砂層によってかなりつき固められていたが、西トレントの中央は径2mほどの堀り込みにより破壊されている。この集石層は京極氏の遺構面より下層にある。

C区はA区と同様に隅櫓（SB004）の周囲から、多聞遺構と排水路を検出した。またSB004は天守やSB002と同じ構造をもつ。SB004の南石垣の直下から南へ延びる礎石列があった。本丸の西石垣から約5mのところにあり、内部は栗石敷きをしている。西多聞（SB013）と推定される。東石垣の直下からも東へ延びる礎石列が検出された。本丸の北石垣から約5mのところにあり、内部

に1つ礎石が確認され、栗石が所々みられる。北多聞(SB014)と推定される。SB004、西多聞(SB013)、北多聞(SB014)の周囲には、排水路(SD004、SD005)が沿う。SB004の周囲から検出された遺構は瓦、漆喰を含む搅乱層の下から検出した。

D区の隅櫓(SB010)は栗石を敷きつめていることから、本丸の各隅櫓、天守と同じ構造といえる。SB010は明治2年(1869)に藩邸とともに焼失している。礎石・石垣はろく、ひび割れている。栗石も赤色をしている。

E区の隅櫓(SB011)の周囲には、瓦・漆喰などを多量に含んだ廃棄層があり、その下が遺構面となる。遺構面からは礎石、塙跡などの遺構は検出されず、木図どおりである。

F区は表土をはがしたのみであり、次年度から本格的に発掘調査をおこなう予定である。

## V 遺 構

### a 隅櫓跡

SB002(本丸東南隅櫓)・SB004(本丸西北隅櫓)・SB010(三の丸西北隅櫓)を調査した。いずれも内部は栗石が敷きつめられ、その上に礎石を配置している。昭和25年に解体修理された天守と同じ構造である。

#### SB002(本丸東南隅櫓)

東西8.1m、南北10mで、4間×5間の建物である。櫓の西石垣は樹木の根により歪みを生じている箇所がある。礎石は4石残っている。櫓内は、昭和の土壤、埴土が所々にある。なかでも、SK002は櫓内部まで掘り込んで搅乱している。SK002の調査から、櫓の内部構造が栗石敷きであることが確認された。SK002からは、『昭和24年修理之印』と刻印された瓦や製造者を記した瓦まで多数出土した。昭和25年の天守の解体修理の時に余った瓦を廃棄したのであろう。遺構面からの石垣高は、西、北側で1m、東側で約0.7mである。

#### SB004(本丸西北隅櫓)

東西9.5m、南北9.6mでほぼ方形をしている。櫓内は栗石敷きとなっていて、その上に礎石を配置する。礎石はすべて残り、5間×5間の建物である。礎石は長方形か方形であるが、不定形のものもある。全体的にみて、礎

石はあまり整形されていない。礎石は30×40cmから50×90cmの大きさであり、統一されていない。SB002に残る礎石も同様で、木丸の隅櫓の礎石は、あまり整形されていない。SB004の礎石間隔は、礎石心心約1.9mを測る。また、造構面からの石垣高は約0.45mである。北側2箇所に望遠鏡が2基設置されていたため攪乱をうけている。また、電線が望遠鏡設置跡から東側石垣の中を貫通していることから櫓内部の栗石は掘り返されている。

#### SB010(三の丸西北隅櫓)

東西8.24m、南北10.68mの平行四辺形の櫓である。櫓内の構造は本丸の隅と同じく、栗石敷きとなっている。東から2列目、南から3番目の礎石だけは確認できなかった。4間×5間、礎石は11あり、方形礎石が2、長方形礎石が9石ある。方形礎石は80×80cmで、長方形礎石は50×100cmから60×120cm、平均すれば60×100cm前後のものが最も多い。本丸の礎石と比較すると大型である。櫓の石垣が平行四辺形をしているため、礎石もそれにあわせて歪んでいる。礎石の間隔は心心々心で、2mを測る。礎石、栗石は赤色化し、他の隅櫓に比べて、いちぢるしく石垣や礎石は脆くなっている。明治2年の落成焼失時に、本櫓も焼失したことを裏付けている。

#### b 多聞

本丸の隅櫓周囲から、礎石列が検出された。これらは絵図・木図にみられる多聞の遺構であろうと推定できる。

#### SB012(本丸南側多聞)

SB012の西側に本丸の南石垣から約5.40mのところに石垣と平行に並ぶ礎石の配列がSB002に付属し、西側に延びている。礎石の大きさは、SB002に最も近いもので、40×80cm、その他は35×65cmないし40×65cmの大きさである。多聞の内側基礎の礎石列である。これと直交する礎石列が2本ある。

SB002の西石垣から0.2mのところの礎石列は、多聞の内側基礎の礎石列から1mのところに、25×40cmの礎石、そこから0.5mのところに、25×35cmの礎石がある。SB002の西石垣から1mの礎石列は、多聞の内側基礎の礎石列から1.8mのところに55×30cmの礎石、1.5mのところに55×30cmの礎石がある。

#### SB013(本丸西側多聞)

SB004の南側に本丸の西石垣から約5mのところに石垣と平行に南へ延びる礎石列を検出した。SB012と同じく多聞内側の基礎の礎石列である。礎石の大きさは50×65cmと25×55cmのものがある。断面をみると、礎石の外縁に、

高さ約30cmの塗喰が残り、内側に約7cmの黄橙色粘質土層がある。そこから、礎石の内側まで灰黄褐色粘質土、その上へ黄橙色粘質土、灰白粘質土、にぶい黄橙色粘質土を版築状にしている。礎石上にあるため、壁の遺構である可能性は高い。SB013は、東石が全面に敷きつめられていた。掘り込みレベルが低いためか、直交する礎石は確認していない。

#### SB014(本丸北側多聞)

SB014の東側周囲、本丸の北石垣から約5mのところに北石垣と平行に東へ延びる礎石列を検出した。多聞内側の基礎の礎石列である。礎石は、35×85cmの大きさで、SB014の内部からも1礎石検出した。SB004に最も近い礎石の外縁から2.25m離れ、35×50cmの大きさである。また内部には小石が散乱している。

#### c 建物跡

##### SB015(礎石建物)

SB015はSB002の東側周囲から検出された礎石建物で南北3.7mである。東西は西半分しか検出していないため、長さは不明である。礎石の大きさは40×60cm前後のものが6石、25×40cm前後のものが5石、10×30cm前後のものが3石ある。南の礎石列より北の礎石列のほうのレベルが高くなっている。西の礎石列で北端の礎石の外端から1.2～2.1mの間に礎石はみられなかった。SB015内部は、径1.5mの昭和の土壙(SK003)により攪乱されている。木図・絵図にはみられない建物遺構である。

#### d 石垣(SX001)

SB002の東側、張り出した本丸石垣の内側の保護のため石垣を築いている。石垣から2.2m離れる。遺構面からの高さは、0.6mである。礎石建物SB015瓦の雨落ちSX003の保護のため下部調査はしていない。野面積みで、石垣の石と比べて小さく、整形されていないものが多い。

#### e 排水施設

排水施設は、本丸鶴櫓の周囲を取り巻く排水路(SD002、SD003、SD004 SD005)と本丸の東石垣中にある排水口と通じる暗渠(SD001)がある。SB002とSB015の間に瓦の雨落ち(SX003)がある。

##### SD001

石組み暗渠で、本丸の東石垣にある排水口に通じている。今回の調査では南半分しか検出できなかった。石の長さは約55cmで、礎石や石垣の石と同類の石を使用している。西端の二列の石は昭和の攪乱層(SK004)の上にある

ため、SD001とは関係なく、昭和になり、新しく造られた土壌の土止めのための石列である。

#### SD002, SD003

SB002(本丸東南隅櫓)とSB012(南多聞)に付随する石製排水路である。整形はコ字型をする。外幅31cm、内幅21cm、長さ約10~100cm、深さ12cmを測る。鉤型になる繋ぎ口は粘土で固められ、接着されている。そのため繋ぎ口はわかりにくい。

SD002は、SB002の北石垣から1.25m離れたところを沿う。東はSK004(昭和の土壌)により破壊されているが、SD001と繋がると推定される。西はSK005(昭和の土壌)により破壊されているがSD003と繋がる。SD003はSB002の西側に石垣の約1.2m離れたところを沿う。SB002から1.2m、SB012から1mのところで、直角に折れ、SB012の礎石列1mのところを平行に沿っている。

#### SD004, SD005

SB004とSB013, SB014に付隨する石製排水路で、SD002, SD003と同類である。外幅30cm、内幅20cm、長さ約70~80cm、深さ約16cmである。SD004はSB004の南石垣から1.2mのところを沿い、SB004から1.2m、SB013から1mのところでT字型に折れ、SB013の礎石列1mのところを平行に沿っている。SD004の東は攪乱により破壊されているが、SD005と繋がる。SD005はSD004の南石垣から1.25m、東石垣から1.15mのところで直角に折れ、SB004の東石垣から1.15m離れたところを沿う。SK006(昭和の土壌)により、北側は破壊されているがSB014から、約1m離れた断面に残っていた。

#### SX003(瓦の雨落ち)

SB002の東側石垣から1~1.5m離れたところに、南北並ぶ瓦の雨落ち(SX003)がある。平瓦・軒瓦を堅に並べたもので、幅は37~40cm、長さ6.20cmある。使用している平瓦は、長いもので42cm、平均して15cmある。瓦幅は1.5~2cmあり、外側に長い瓦を並べている。南端から1.76m~2.17mは木の根により破壊されている。

#### SX004(不明集石層)

B区西トレチの西端から検出された。人工的に突き固められ、集石している。厚さ0.5mあり、盛り土層の上にある。

## VI 出土遺物

遺物整理の途中のため概略を述べると、出土遺物は、瓦・釘・漆喰・壁土・木片・獸骨・貝殻・土師質皿及び杯であった。

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦が出土した。

軒丸瓦は、小菊紋、扇紋、四つ目紋、三つ巴え蓮珠紋がある。小菊紋は12花弁のものが多く、16花弁をもつものも出土した。扇紋は山崎氏の家紋で径約17cmと径約13cmの二種類の大きさのものがある。四つ目紋は京極氏の家紋で径16～16.5cmにはほぼ統一されている。三つ巴蓮珠紋は数種類みられるが、同じ苑型のものもある。

丸瓦は完形が出土している。長さ30cm、横幅14.5～15cm、厚さ2.1cmである。

軒平瓦は中央に菱・左右に唐草紋をもつ瓦、四つ目紋の瓦、朝日紋の瓦などが出土した。中央に菱・左右に唐草紋をもつ軒平瓦は横幅27.8cm、高さ4.5cm、厚さ1.9cmある。四つ目紋の軒平瓦は横幅28.2cm、高さ4.5～15cm、厚さ1.9cmで、「文」・「喜」・「卯」などの刻印をもつものがある。

釘は瓦や漆喰が出土した層から出土した。長さ4.5～15cm、厚さ0.5～0.6cmのものがある。

漆喰と壁土は各隅櫓(SB002・SB004・SB0011)の周囲から出土した。明治10年に取り壊された時のものである。

木片は朽ちたものが多く、釘がささった状態で出土したものもある。

獸骨・貝殻はSB004の周囲から出土した。

土師質皿・杯は、回転ヘラ削りされている、口縁、器台部分は数種類あり、まだ整理塗中なので、次の機会にまとめたい。

## VII まとめ

整理作業段階であるため、造構・遺物の成果を簡潔に述べる。

### 1. 生駒氏築城以前～生駒氏築城時

岩盤(地山)の上面から土師質の杯や皿が出土した。祭祀造構か本城に先立つ砦の存在の可能性がうかがえる。

### 2. 生駒氏築城時～山崎氏築城時

生駒氏時代の天守は現時点の調査では確認できなかった。B区西トレント

西側の 65.20 m ( 標高 ) で人工的に粘質土で固められた集石層がみられた。どのような遺構であるか不明である。また、B 区東トレソーチで検出された岩盤の最も高い地点は 65.60 m であるため、岩盤が露呈していたことも考えられる。また、この岩盤が、このレベルでどこまで続くか追う必要がある。生駒氏築城時から山崎氏の丸亀城を考えるうえで重要である。

### 3. 山崎氏～京極氏時代

現在の丸亀城の繩張りは山崎氏時代から京極氏時代にかけてのものとされている。隅櫓の周囲から山崎・京極両氏の瓦が出土したことからもうかがえる。隅櫓跡の内部構造はすべて天守と同じ構造をしていた。天守の完成は万治 3 年 ( 1660 ) で京極氏時代に完成している。また、多聞跡の礎石列が確認され、本丸隅櫓及び天守は多聞で連結されていたようである。資料館に保存されている木図 ( 京極時代 ) と合致している。また、それらの付属施設として排水路が周囲 1 ~ 1.5 m 地点を沿っている。櫓の周囲からは京極氏の四つ目紋が多く出土する。A 区東側からは木図・絵図にもない礎石建物 ( SB015 ) が検出された。また、この礎石建物 ( SB015 ) と隅櫓 ( SB002 ) の間に瓦の雨落ち ( SX003 ) が検出されている。また、礎石建物北側に土壇 ( SK001 ) があり、小菊紋瓦が多数出土した。また、その北には、排水口とつながる暗渠が存在する。SB002 の北側遺構面から 0.6 m 下の 64.80 m ( 標高 ) のところから、石垣の石と同様の石が検出された。また、石垣下からは楽石がかなり確認されている。石垣の下部と推定される。

三の丸の隅櫓周囲からは、木図どおり多聞や堀などの遺構は確認できなかった。排水路の残骸があり、三の丸にも排水路があった可能性はある。

山崎氏・京極氏の築城を考えるうえで木図がかなり有効であることがわかった。排水路は山崎氏の時点まで廻るかは不明であるが、京極氏の時代には確実に使用されている。

### 4. 明治以降

瓦、漆喰を含む搅乱層は明治 10 年の本城破壊時のもので、隅櫓周辺から確認された。A 区東側の 60 cm もの厚みのある瓦の廃棄層は、廃棄した瓦をこの部分に集積したものと考えられる。昭和 25 年の解体修理時の古瓦が同様に廃棄されたと考えられる。また、本丸東南隅櫓とその周辺に大小様々な昭和の土壇 ( SK002・SK003・SK004 など ) がある。なかでも隅櫓内の SK002 では『昭和 24 年修理之印』と銘うった瓦が出土した。解体修理時にあまつた瓦を廃棄したようである。

今回の調査の結果としては、本城は部分的には破壊をうけているが、遺構の保存状態は極めて良好であると判断された。

#### 註

1. 『讃岐丸亀城研究調査報告書』( S 63. 丸亀市教育委員会)中に掲載の宮上茂隆論文による。
2. 「多聞」とは、城の石垣上の長屋である。松永久秀の築いた大和多聞城に由来するものである。

#### 参考文献

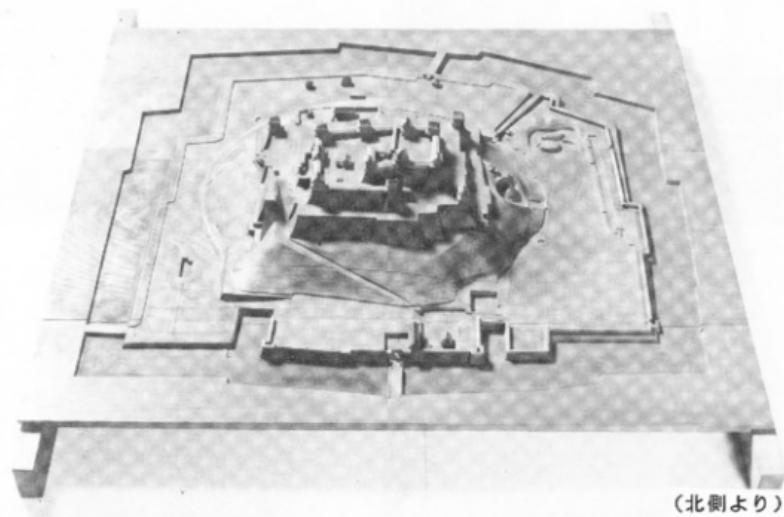
- 『讃岐丸亀城研究調査報告書』( 1988 , 丸亀市教育委員会 )  
『新修丸亀市史』( 1971 , 丸亀市市史編集委員会 )  
『丸亀市の文化財』( 1988 , 丸亀市教育委員会 )  
『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』( 1987 , 香川県文化財保護協会 )

## 写 真

1. 木 図
2. "
3. A 区 発掘前（西から）
4. " " (北から)
5. " 本丸東南隅櫓 (SB002) (北から)
6. " SB002の内部構造
7. " 東側 瓦の廃棄層
8. " " 漆喰, 壁土
9. " " 碇石建物 SB015  
          瓦の雨落ち SX003  
          石    壠    SX001
10. " "
11. " "
12. " " 石    壠 (SX001)
13. " " " "
14. " " 暗    渠 (SD001)
15. " " 東石垣内側
16. " 北側 排水路 (SD002) 東から
17. " " SD002 (西から)
18. " " " と四つ目瓦
19. " " SK003
20. " SB002の西側
21. " 西側と SB002
22. " 南側多聞 (SB012) と排水路 (SD003)
23. B 区 発掘前
24. " "
25. " 東トレンチ 岩盤
26. " " " "
27. " " 土師質皿・杯の出土地点

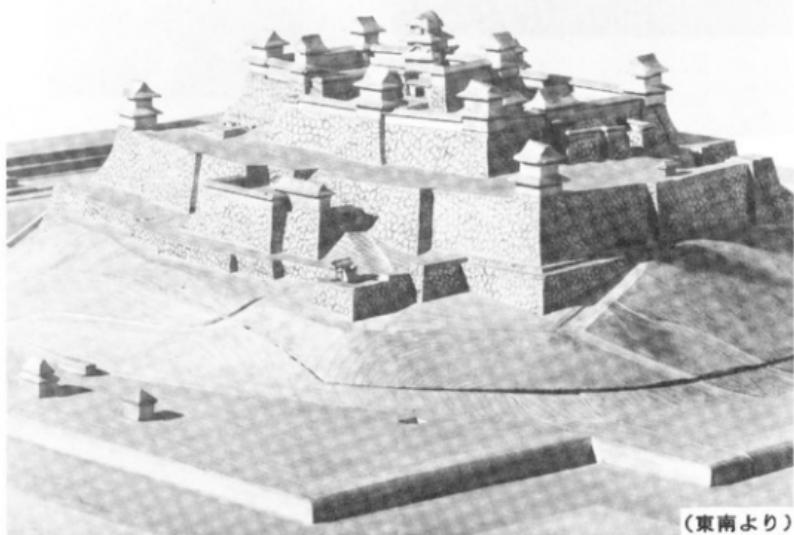
28. B 区 出土土師質皿
29. " 西トレンチ
30. " " " 下層の石列
31. C 区 発掘前（南から）
32. " 本丸西北隅櫓（SB004）
33. " SB004とその周囲
34. " 西側多聞（SB013）と排水路（SD004）
35. " 多聞（SB013）
36. " 漆喰残存断面
37. " SB013とSD004（西から）
38. " " " (東から)
39. " " " (" )
40. " 北側多聞（SB014）(北から)
41. D 区 三の丸西北隅櫓（SB010）
42. " SB010 (東から)
43. " " (南から)
44. E 区 三の丸西南隅櫓（SB011）発掘前
45. " 北側 SB011の北石垣
46. " 東側 " の東石垣
47. F 区 井戸曲輪発掘前
48. " 井戸曲輪

①



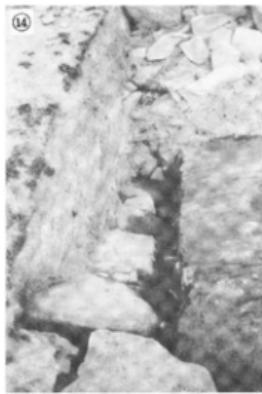
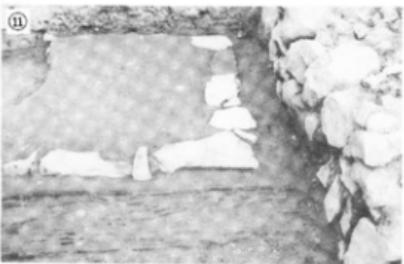
(北側より)

②

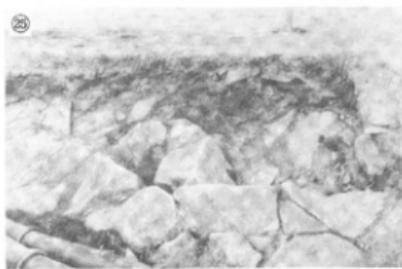


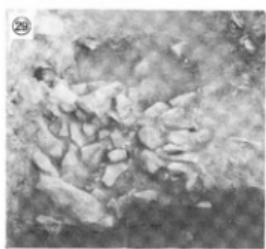
(東南より)

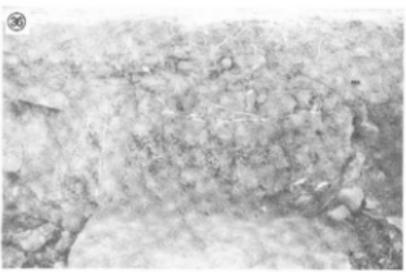
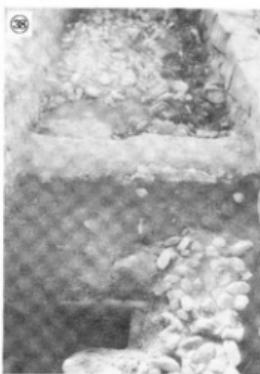
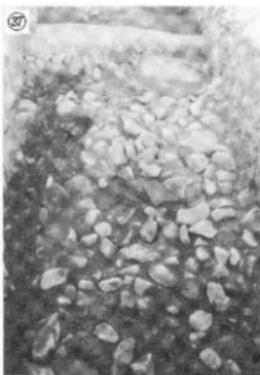
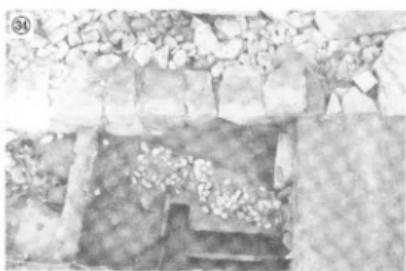




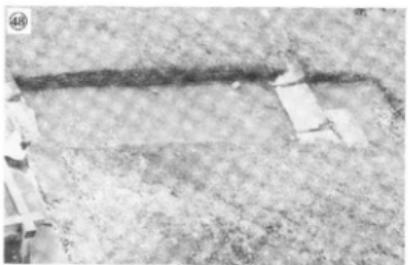












①



④



②



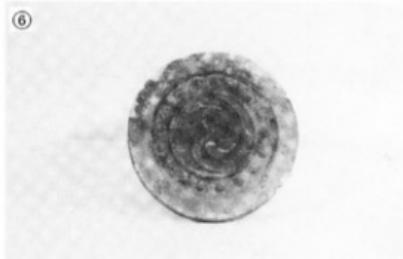
⑤



③



⑥



(7)



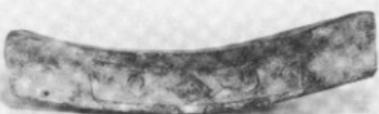
(10)



(8)



(11)



(9)



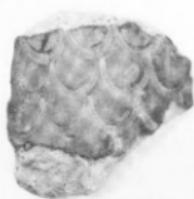
(12)



(13)



(16)



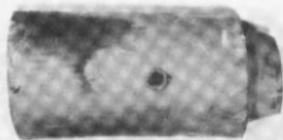
(14)



(17)



(15)

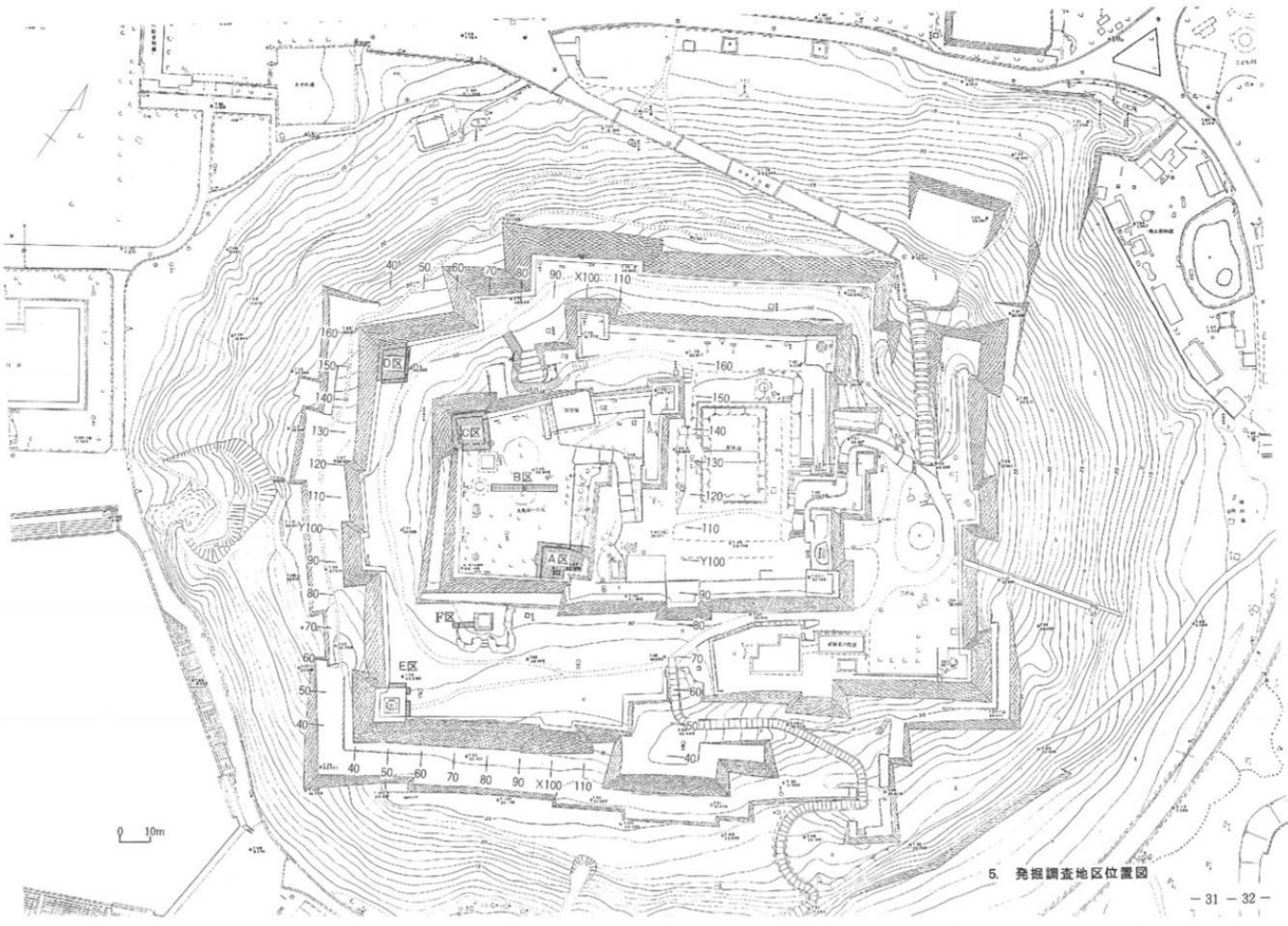


3.3

## 図 版

1. 丸亀市遺跡地図
2. 生駒氏絵図（「讃岐丸亀城以中図宿之」尊経閣文庫蔵「諸国居城之図」の内）
3. 山崎氏絵図「讃岐国丸亀城」（丸亀市立資料館蔵 14・23(市文化財) もと大洲文庫）
4. 京極氏絵図（「元文年讃岐国丸亀城絵図」丸亀資料館蔵 14・12）
5. 発掘調査地区位置図
6. 丸亀城水堀および城下町海岸線復原図
7. 排水路接合部分模式図
8. SB002 東側
9. A 区平面図
10. SX001 と SB002 の石垣実測図
11. B 区西トレント平面図
12. B 区東トレント平面図
13. B 区西トレント南側断面図
14. B 区東 ノ ノ
15. C 区平面図
16. C 区石垣実測図
17. D 区平面図
18. F 区平面図





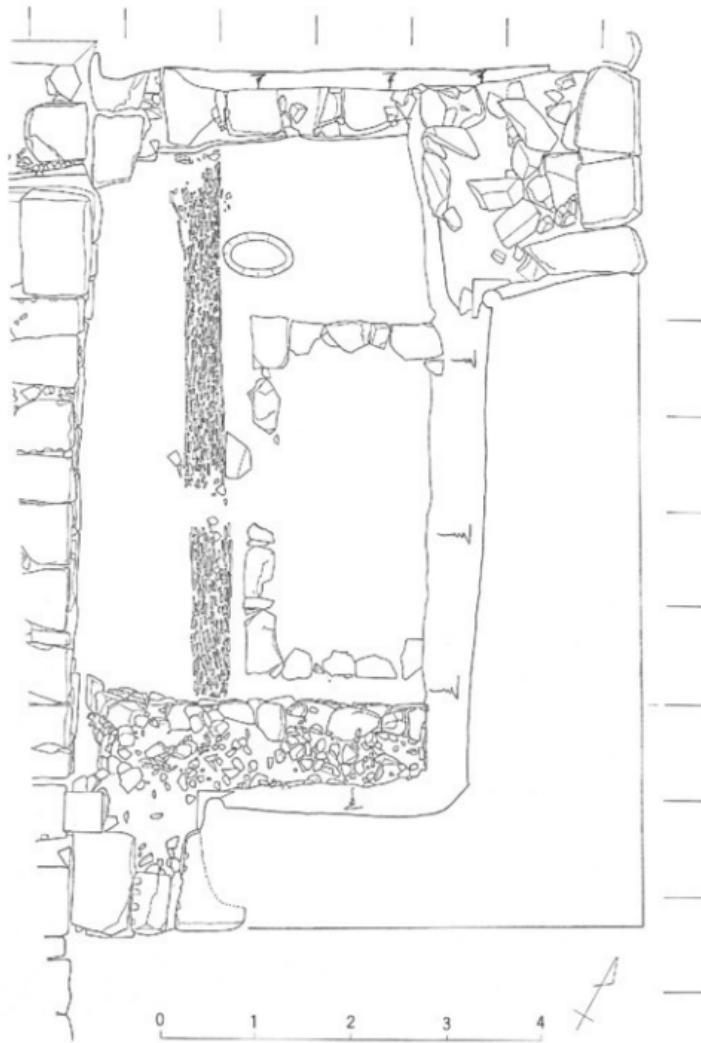
5. 発掘調査地区位置図



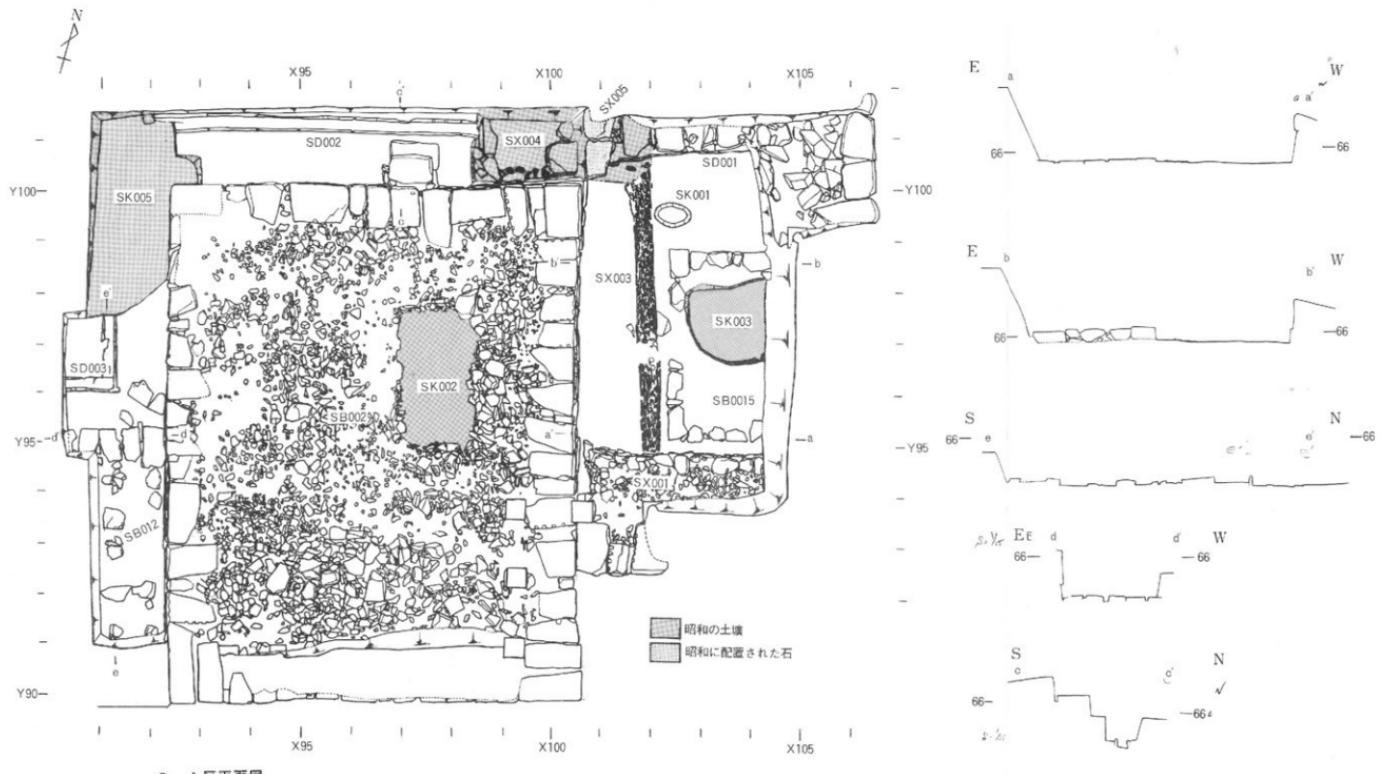
6. 丸亀城水堀および城下町海岸線復原図



7. 排水路接合部分模式圖



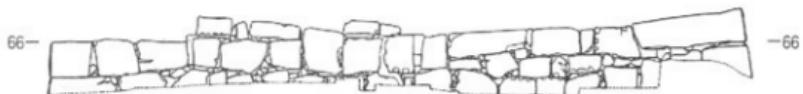
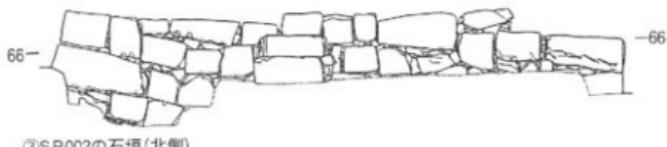
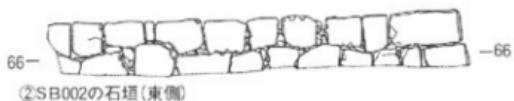
8. SB002 東側



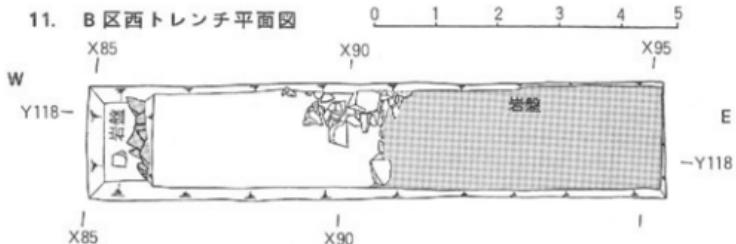
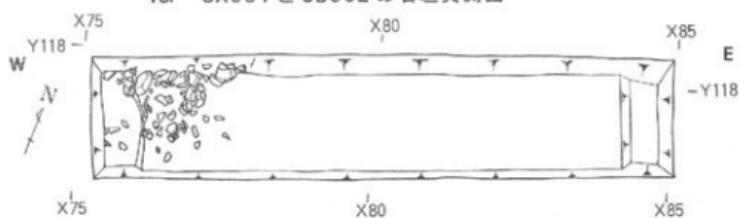
### 9. A区平面図

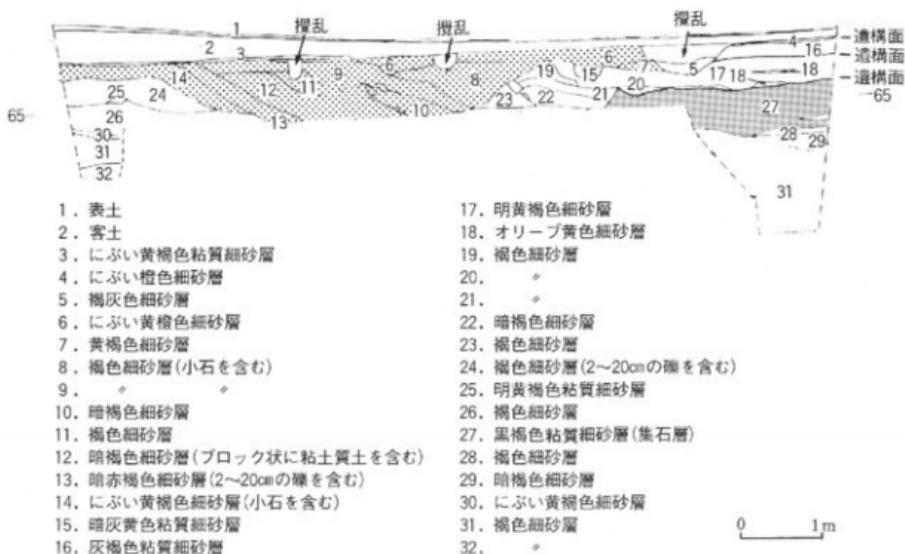
0 5 m

0 1 m

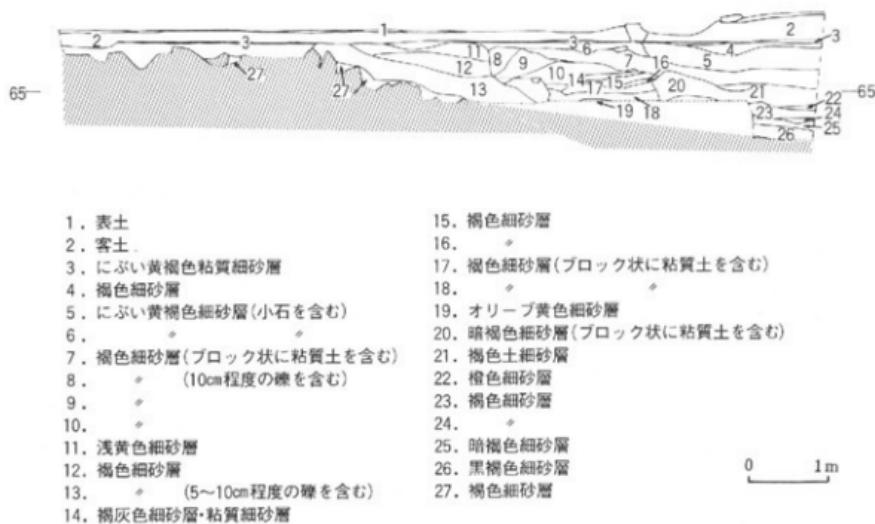


10. SX001 と SB002 の石垣実測図

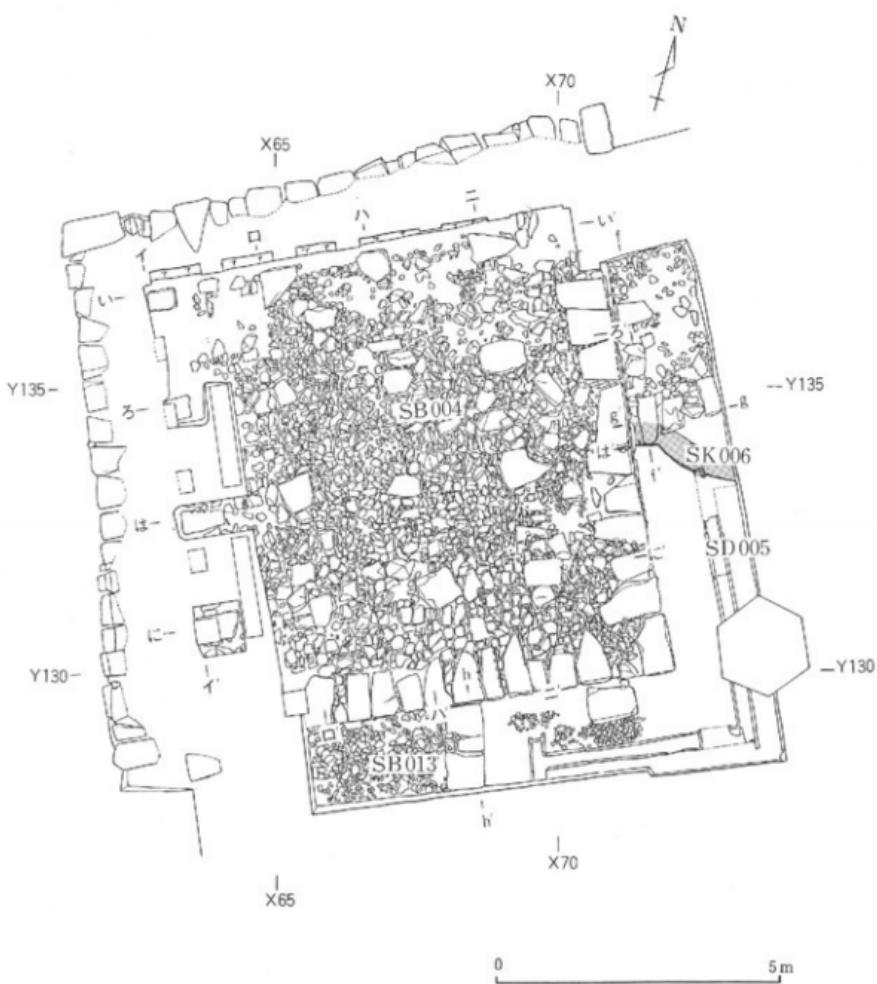




13. B区西トレンチ南側断面図



14. B区東トレンチ南側断面図



15. C区平面図

い 66— —66 い'

ろ 66— —66 ろ'

は 66— —66 は'

に 66— —66 に'

ニ 66— —66 ニ'

ハ 66— —66 ハ'

口 66— —66 口'

イ 66— コンクリート —66 イ'

0 2m



C区 SB01 磁石断面図



C区 SB01 磁石断面図

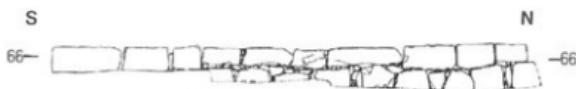


C区 SB01 磁石断面図

0 1.5m

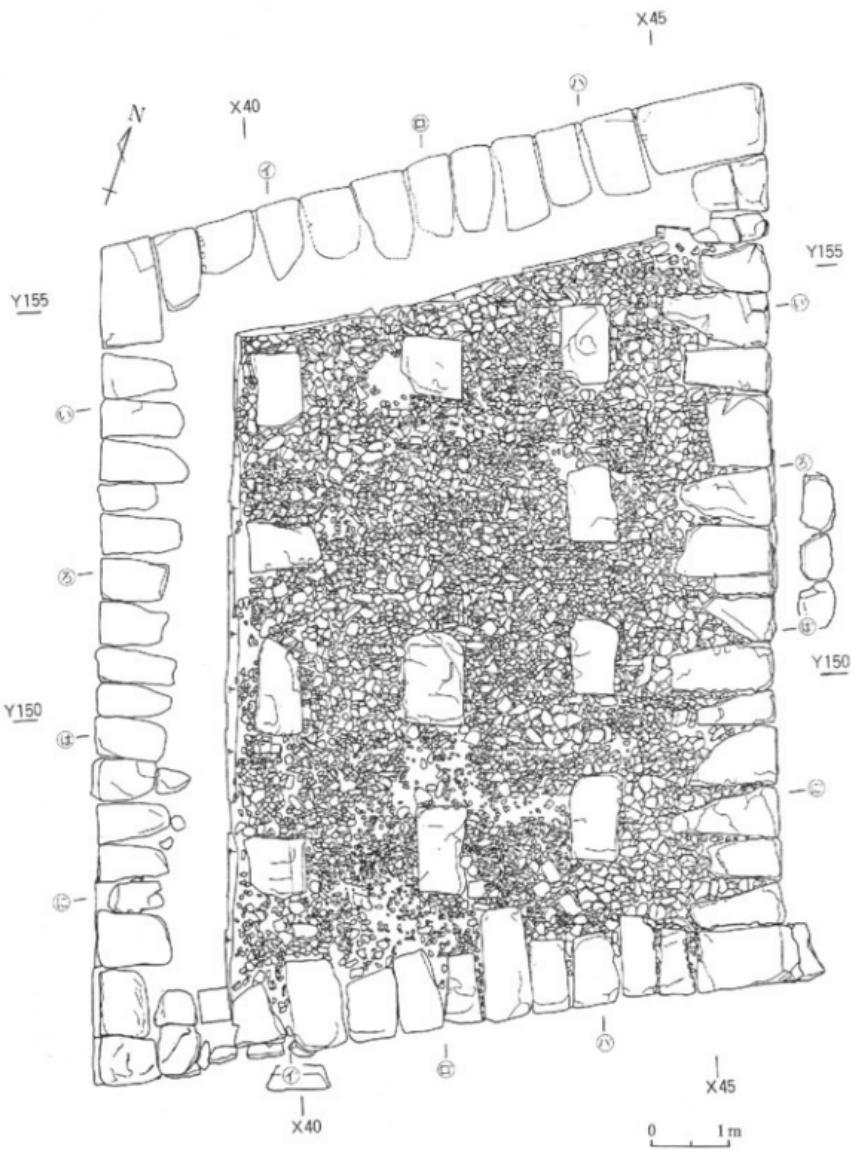


0 2 4 m



0 2 4 m

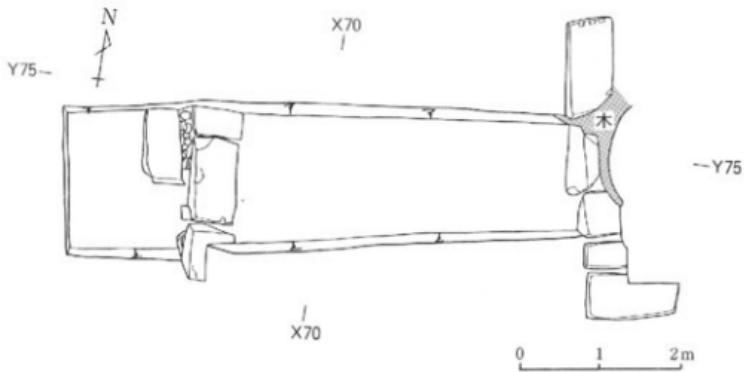
16. C区石垣実測図



## 17. D区平面図



0 2 m



18. F 区平面图